

令和七年度 長岡大学 一般選抜(Ⅲ期)

国語

— 次の文章を読み、後の問に答えなさい。

高校の古典の授業で、紫式部や清少納言という呼び名は実の名ではなく、夫や父の官職などからつけられる通り名であることを教えられ、女の名を知るとはその女を自分のものにする事だったからと説明された。たぶん、「知る」は支配する、領有することの意であることは古典の基礎的な知識になっている。

この知識は『伊勢物語』初段の「昔、男、うひかうぶり初冠して、平城ならの京春日かすがの里に知るよしして、狩りにいにけり。」の例などによって、確実なものとしていく。平安京の貴族がなぜ奈良の春日の里に行くかといえば、そこに「知るよし」つまり領地があるからという説明は納得しやすい。たとえば、ある土地について「知る」ことによって、それまで未知だったそこを自分の理解の中に含められるからだ。つまり自分の感覚や思想の範囲に収めてしまうのが「知る」ことの特徴である。

そう考えると、この言葉は、実はたいへん恐ろしい。「知る」ことは、自分の感覚や思想の範囲から出ることではないのである。逆に、自分の感覚や思想を周囲に押し広げているだけだということになる。もちろん、自分の存在する社会に共通する思想や感覚ほどの社会、人間にも通じるわけではない。通じる、あるいは自分たちの思想や感覚が普遍的だと思いついでいる傲慢ごうまんさを、我々は歴史の上でいくつも知っている。とくに、近代以降の西欧思想がそうで、さらにそれを日本が近隣諸国に対してしている。この世界に共通するのは、人間は感情や思想を持っているということだけであって、感情や思想の内容ではないのだ。子供を社会全体のものと考えている社会では、母子の情はそれほど深くはない。むしろ母が子を独占することこそ罪悪と考えている。そういう社会に対して、母子の情は普遍的な感情と考え、母子の情愛が薄いと非難するのはおかしいわけだ。

古語を現代語に置き換えても、その古語と現代語が完全に一致するわけではない。そういう限界の上に古典解釈は成り立っている。もちろん、これは古典だけでなく、異なる社会、つまり外国理解についても同じだ。「知る」はAそういう危うさを考えさせてくれる言葉なのである。

「知る」を支配する、領有するの意とする説明は間違っていない。積極的に正しいと言ってもいい。そのことを示す例に、天皇が「あめ天の下 知らしめす」(『万葉集』)存在であることがある。どの注釈書も「天下をお治めになる」と現代語訳している。この「B治める」とはどういうことだろうか。大和の豪族が日本列島を統一したことはだれでも知っている。したがって、大和朝廷の秩序が及ぶことが「治める」ことであった。そのレベルでは、「知る」ことはある一定の秩序に治めることなのである。

三十年ほど前になるが、大学入試の発表を見て、そのまま夜行で山陰に旅に出たことがある。ひとり旅だった。山陰に入って各駅停車に乗ってからは、耳にするのが方言ばかりでほとんど理解できず、一週間、宿の交渉以外口をきかずに過ごした。我々は、同じ日本語だからどこへ行っても通じると思いがちだが、こういう状況は古代でもあまり変わらなかったはずである。古代は言葉が共通で、それがしだいに地域ごとに方言が成立していったというわけではない。都が成立して共通語ができ、中心が定められることで、中央の言葉に対して方言が成立する。それ以前はそれぞれの地方がそれぞれの言葉を持っており、それぞれが中心だったというより、中心などなかった。ある地方にとって、別の地方の言葉は、極端に言えば外国語と同じだったように思える。

「ふじき風土記」や『日本書紀』では、大和朝廷に従わなかった土着の人々を「つちぐも土蜘蛛」と呼んでいる。たとえば、今の佐賀県の島に住む土蜘蛛は「ようぼうはやと容貌隼人に似て、恒つねに騎射を好み、その言語、俗の人に異なれり。」(『肥前国風土記』松浦郡)と言われている。「その言語、俗の人に異なれり。」から異民族とする説があるが、異民族とする前提には日本民族という概念がなければならぬ。大和朝廷は農耕民を中心に据えたから、農耕民や宮廷に奉仕する技術者たちを百姓として位置づけた。百姓は百の姓、つまり多くの姓を公認された人々のことである。公認の姓は平安初期に『しんせんしやうじやく新撰姓氏録』という書物に登録整理された。由緒正しい国民というわけだ。そういう基準から見れば、あわび鮑などをにえ贄として朝廷に奉納する海人である松浦郡の辺りの島の人々は異人であった。

そして、異人にも贄を納めさせ、秩序の内に抱え込むのが「知らず（「知る」の未然形に尊敬の助動詞「す」がついたもの）」ことだったのである。

「知る」がそういう内容になるのは、中心が成立し、その秩序が絶対化されて以降である。それでは、それ以前はどうだったのだろうか。「知る」を活用してみると、シラ・シリ・シル・シル・シレ・シレとなる。沖縄では刈り取った稲を積んだものをシラと言う。さらにそのシラは産むこともさす。八重山の波照間島には兄妹始祖神話があるが、その兄妹が初めての子を産む場所がシラ石であった。このシラ石は白石でもある。白と産むは、生まれたままの、まだ何にも染まってない状態と考えれば共通する。神子が白い衣を着る、白鳥を神の使いと考えるなど、白が神の色、神に近い色、神に近づくための色であることは古代の文献からも証明できる。

したがって、まず、生まれること、つまり神々の世からこの世に現れ出ることにかかわるのがシル系統の言葉であると言えそう。現れ出たその最初の状態が白なのである。その意味では境界的な内容と言える。神子が白い衣を着ることも、そう考えれば納得できる。

そこで「しらす」だが、天皇は神々の世である高天の原から降臨する神であることよって天皇たり得るのだから、「天の下しらしめす」は高天の原から地上にお生まれになるの意である可能性がある。なぜ降臨するかと言えば、この地上世界に神々の秩序をもたらすためだから、結果的に治めるの意にはなる。もちろん、大和朝廷が勢力圏に収めていった地域の人々は秩序内に入り、共通の文化を持たされていった。言うならば、「知る」とは、その秩序内に収めることになったのである。それは、文化の優位性の主張でもあった。

すると、「知る」の元の意味は、ある対象に対して、そこに生まれる、つまりまつさらな状態になること、こちらの感情や思想を捨てて相手の側に入り込むことだったと考えられる。それが中心が成立することで、権威化され、こちらの理解を対象に押しつける意になった。したがって、こちらを動かすことをしないで対象に向かっているとしたり、我々は自己を権威化していることになる。それが、日本文化と言われる共通の文化を持って以降の「知る」の意なら、それでしかたないと言えるが、「知る」が支配するという意味だと簡単に結びつけるのは、まさに現代の概念を権威化して、古典に当てはめているだけになる。結局、「知る」の意を、我々の感覚や思想の束縛から離れて、きちんと歴史の中で知る(!!)ことが大切なのだと思う。

(古橋 信孝『雨夜の逢引―和語の生活誌』による)

問一 傍線部B「治める」(おさめる)に関して、「おさめる」と読む漢字として次の1〜4がある。以下のア〜オの各空欄に入る最も適切な漢字を1〜4から一つずつ選び、番号で答えなさい。

1	治	2	納	3	収	4	修
---	---	---	---	---	---	---	---

- (一) 記録に(ア)める。
- (二) 宝物を手中に(イ)める。
- (三) 領主としてその地域を(ウ)める。
- (四) 大学に進学して学問を(エ)める。
- (五) 学校に学費を(オ)める。

問二 傍線部A「そういう危うさ」について、以下の各問いに答えなさい。

- 1 「知る」ことで、それまで未知だった事実についての理解が深まることにより、古典と外国について混同してしまう危険性があること。
- 2 「知る」ことは、支配する、領有するという権威主義につながってしまうこと。
- 3 「知る」ことで、母親の情がそれほど深くない社会が存在する状況を理解すること。

4 「知る」ことは、自分の感覚や思想を押し広げて、自分の感覚や思想がどの社会でも通じるという思い込みにつながりうること。

5 「知る」ことは、近代以降の西欧思想を世界的な共通の考え方に発展させる可能性があること。

(2) 「そういう危うさ」を避けるにはどのようなことが必要か。本文中の言葉を用いて、三〇〜四〇字で答えなさい(句読点を含む)。

問三 筆者は、「知る」の意味が変化したと述べている。変化する前と後とでの「知る」が意味する内容の変化について整理した左の文中の空欄ア〜ウに入る最も適切な語句を本文から抜き出して記入しなさい。

「知る」の元の意味は、こちらの感情や思想を捨てて相手の側に(ア)ことであった。それが、中心が成立してその秩序が絶対化されて以降、こちらの理解を対象に(イ)意味に変化した。さらに『伊勢物語』などの古典によると、自分の感覚や思想の範囲に(ウ)てしまうという意味になっていることがわかる。

問四 本文の内容と一致するものに○、一致しないものに×を書きなさい。

- 1 「知る」が生まれることを意味する言葉になったのは、中心が成立してその秩序が絶対化されてから後のことである。
- 2 「知る」という言葉が支配するという意を有すると考えるのは正しくない。
- 3 自分たちの思想が普遍的であると考えるのは傲慢な姿勢である。
- 4 大和朝廷の時代より前に、中央というものが存在しなかった時代には、「知る」に領有する意はなかった。
- 5 「知る」の意味を歴史にまどわされることなく今の感覚でしっかり押さえておくことが重要であると、筆者は主張している。
- 6 大和朝廷は農耕民を中心に据え、農耕民や宮廷に奉仕する技術者たちを百姓として位置づけたが、それは「知る」ということであった。

二 次の文章を読み、後の問に答えなさい。

これからの社会と倫理を考える一助^アとして、これまで人類がめざしてきた社会と倫理はどのようなものであったか、をあらためてふりかえてみたい。

日本国憲法や世界の多くの国々の憲法は、ヨーロッパ近代の思想家たちが構想した社会像をもとにしている。それは「自由」を中核とするものであり、大きく二つの^A焦点をもつ。

一つは「人権」である。自分の意志で職業や結婚相手を選べる。他人から邪魔されることなく自分の考えを表明できる。そして最終的には「自分がよいと思う生き方」(自分なりの幸福)を追求できる。このような思考と行動の自由を、だれもがもつ「権利」として取り決めたものが人権である。

もう一つは「自治」である。社会の構成員が互いの意見を表明しあいながら、「どの人にとっても利益となること」をルールとして取り決め、それに従って社会を運営していく、というものだ。自分たちで社会をつくれる、不都合があってもともに解決していく、という共同的な自治の自由を、近代の思想家たちはやはり大切にしていた。

前者の「人権」については、日本社会ではかなり広く認められるようになった。それはよいことだが、しかし、自分がよいと思う生き方を追求する、というとき、そもそも「何」を追求すればよいのかについて、確信が持てない人は多い。だから、価値あると信ずることを力を尽くして実現しようとする生き方——そのとき人は、困難があっても自由を実感できる——がなかなかできな

い。そして、生き方の自信がないと、それだけ周囲の目が気になってしまふ。

後者の「自治」についてはどうか。地域の住民が意見をかわしながら自分たちの手で公園を整備したり、川の掃除や保全を行ったりする自治の活動が、いま日本社会のあちこちで行われている。しかしこのような「共同的な自由」の喜びと無縁に生きている人も多い。「集団の中で自分の想い^{おも}を出すのは危険だ。自分からは何も言わず、集団の空気を読んで対処しないといけない。」という感じ方のほうが、ひよっとすると多数派かもしれない。

(①)、自分の信ずる価値を表現するという点でも、語りあいながら共通の問題を解決していくという点でも、私たちはいまだ「自由な主体」になっているとは言い難いのである。^B

では、自由な主体へと人が成長していくために、必要な「条件」は何だろうか。その核心は、一言で言うことができる。互いの想いをていねいに尋ねあい確かめあうこと、である。

もし私たちが、どんな意見を言っても攻撃されることがなく、互いの想いをちゃんと受けとろうとする雰囲気の中で——この雰囲気をつくるのが大切なのだが——何かのよしあし(価値)について意見を交換できたでしょう。そして、自分とまったく違う意見に対しても、なぜ相手がそう考えるのかを尋ねてみる。すると「なるほど、この人の意見は、こういう生活実感から出てきているのか。」ということがよくわかる。

このように、互いの想いをていねいに受けとめたなら、それに続いて「こう考えるほうが『よりよい』のでは。」という議論に進むことができる。そして、このような語りあいを積み重ねることによってはじめて、私たちは「こういうことが大切なのだ。」という価値の確信——^A独断的¹でなく、その理由を説明できる確信——を育てていくことができるのである。

(②)、集団を営む自治の力も、やはりこうした尋ねあいの中から育ってくる。メンバー個々の事情や想いをていねいに確かめあったあとで、「では、どうすることがみんなにとってよいか」を議論し、合意をつくっていく。その合意が納得できるものであるなら、各人は自分のできることを進んで「役割」として担おうとするだろう。

私たちはいま、近代の思想家たちが想像したよりも、はるかに多様な態度と生き方とをもっている。だからこそ、「尋ねあい」の作法が必須なのだ。こうした作法を、教育現場や、コミュニティに関わる活動や、企業の内部でも育てていくことが、自由で風通しのよい社会へとつながっていくはずなのである。

(西研「自由な主体に必要な『尋ねあい』」『毎日新聞』(二〇一四年六月九日夕刊)による)

問一 傍線部ア、イの言葉の意味として、本文に即して最も適切なものを次からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

ア 一助

- | | |
|-------------------|---------------------------|
| 1 一人を助けること | 2 自分から進んで社会活動などに無償で参加すること |
| 3 みずから犠牲を払って助けること | 4 内部からの支援 |
| 5 わずかばかりの助け | |

イ 独断的

- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1 深く吟味せずに一方的に決定するさま | 2 自分だけが正しいと考えるさま |
| 3 新しい着想が表われているさま | 4 一人の人間が全権力を握り物事を進めるさま |
| 5 独立して事を行なうさま | |

問二 波線部A「二つの焦点」とは、何を指すか。その二つを本文中の単語を用いて答えなさい。

問三 波線部B「私たちはいまだ「自由な主体」になっているとは言い難いのである。」について、筆者はその根拠となる事例を示している。本文中の表現を用いて、六〇〜八〇字でまとめなさい(句読点を含む)。

問四 空欄(①)と(②)に入る最も適切な語句を次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | | |
|-----|---------|------------|---------|----------|----------|
| (①) | (1) やがて | (2) つまり | (3) しかし | (4) ところで | (5) ところか |
| (②) | (1) さて | (2) それにしても | (3) 例えば | (4) 反面 | (5) また |

三 次の文章を読み、後の問に答えなさい。

家をつくる方法は誰も教えてはくれない。「三十路も半ばを過ぎたら、こういう家を購入し、家具や調度はこのようにしつらえなさい」と父から教わった記憶もないし、祖父から諭された覚えもない。これは僕の父が手を抜いていたわけでも、祖父が冷たかったわけでもない。日本の暮らしはここ五十年で激変してしまった。だから父や祖父の時代の知恵の多くは僕らの世代には生かさない。家のかたちも家族のかたちも、コミュニティのかたちも、大きく変わってしまったし、今も刻々と変わりつつある。だから学校でも家のつくり方は教えられない。せいぜい家庭科で雑巾の縫い方や調理の初歩を学習する程度で、状況の不安定なかでは家づくりの指針などには触れられないのである。

ふと気付くと、人々の家に対する欲望の標的は、不動産会社のチラシになっていた。これは 夥しく新聞などに折り込まれているので、自然と多くの人々の目に届く。僕らはそこに記されている2LDKなどという記号から、住空間の分節と意味を教えられ、同時に度はずれた価格を脳裏に刷り込まれてきた。インフレの波に押されるように、さして広くもない間取りに千万単位の価格が付されるようになった。学生時代にこれを見て暗澹たる気持ちになったのを覚えている。

若い頃の一人暮らしはシツソである。六畳一間のアパートで、アルバイトをしながら家賃を払い、日々を過ごしている若者に「DK」や「L」の付いた住空間はそれなりにまぶしいが、数千万円という金額のショウゲキは小さくない。

「えーと、ちゃんと就職したとして、アルバイトよりずっと給料がよくなって、たとえば、手取り四〇万円もらうとして、節約して月に一〇万円貯金すると一年で一二〇万円貯められる。よしよし。それでこのマンションは、んーと、四〇〇万円。ううむ、三十年貯金しても足りない。……」などと、未来を計算して沈鬱な気持ちになった。学生時代に想像するひと月一〇万円の貯金といえはかなりの金額である。一生こつこつ働いてもこの程度の家しか手に入らないのかと考えてがっかりした。

僕が大学院を卒業したのは一九八三年。地価はじわじわと高騰しはじめていた。コピーライターの糸井重里が「今の日本の面白いところは二〇〇万円払っても家が買えないところ」と語っていたのを今でも記憶している。この諧謔味のある指摘に、さすが糸井さん、いいところを突くなあと感心した覚えがある。

二〇〇〇万円出しても満足な家を買えない。さあ、どうするかという、人生の価値配分を当時の僕たちは迫られていたのだ。二〇〇〇万円あれば、どれだけ旅ができるだろうか。一回一〇〇万円の大名旅行が年に一度、二十年間できる。高くなった円は、海外で使う方が有利だ。日本のぱつとしないマンションを買って、どこにも行かないでちんまりとした人生を歩むよりよほどダイナミックな生き方ができるかもしれない。よし、もう家なんて一生賃貸でいい、僕は旅を選ぶぞ、とその時に思ったか思わなかったか。いずれにしても価値と対価のバランスが狂いはじめた当時の日本の決まり事にお金を遣う気がしなくなっていたというのは事実だ。冷静に考えても、平均的な住宅機能の取得に一生の力セギの大半をつぎ込むなんておかしい。

しかし、不動産バブルの崩壊や、水平飛行の時代を迎えた経済環境の中で、土地や家をめぐる状況も変わってきた。二十年で価格が二倍になる時代には、デベロッパは金融業の一種であり、限られた土地からいかに効率よく「2LDK」を切り出すかに夢中だった。しかし、そうしたビジネスモデルは終息しつつある。「家」よりも「不動産」として見られていた住まいも、ようやくその「品質」が評価されるようになってきた。東京の地価も下落・沈静化を見せはじめ、徐々にではあるが、平熱で家をつくらうかと考えられる価格になりつつある。

特に、中古の集合住宅を購入し、それをコンクリートの床や壁だけにもどして、ゼロからつくり直す「リノベーション」という方法が、世間に広がり始めてからは、東京のような都市の家づくりに転機が訪れている。欧州諸国では、街並みの景観保全の観点から、ゼロベースで建築を建て直すことが容易ではないので、家造りの方法としてのリノベーションはむしろ一般的だ。そのた

めの知恵や工夫、そして制度が社会の中に蓄積されてきているわけだが、日本も百年もつような建築が豊富に供給されるようになり、ようやく、その再利用という冷静なムーブメントが起こりつつある。見栄やステイタス表現のためなら大きくてぴかぴかの新品がいいのかもしれないが、用と対価のバランスを合理的に考えるなら、無理をしない範囲でよりカシコイ⁷選択をすればいい。すなわち、長く使う構造体(スケルトン)と、可変性のある内装(インフィル)を分けて考え、良質なスケルトンを吟味して入手し、インフィルを自分の暮らしに合わせて徹底改修すればいいのである。手間さえ惜しまなければ月並みな新築物件を遥かに超える充実した住居になる。

一方では家族のかたちも新しい局面を迎えている。五十年前は四・一人であった平均世帯人数は、今では二・五人。世帯構成のトップは「一人暮らし」で、二位は、「二人暮らし」。上位ふたつを合わせると、全世帯の六割になる。おじいちゃんやおばあちゃんがいる大家族は激減し、子供が巣立ったあとの夫婦二人の世帯や、離婚の増加により独身者の世帯も増えた。この傾向には問題もあろうが、悲観するだけではものごとは前に進まない。この状況をポジティブに捉える視点が必要なのだ。世帯構成の変化は、東京の暮らしに新たな可能性をもたらしている。暮らし方の異なる人々が、皆同じ間取りに住む必要はない。自分の身の丈に合った「住まいのかたち」を自由に構想すればいいのだ。集合住宅の外観は変わらなくても、その内側にめくるめく多様性を育むことができるなら、それは豊かさでもあるはずだ。

日本人は明治維新以降、西洋文明の影響に翻弄⁹され、関東大震災や敗戦のどん底を経験し、一方では世界にも稀な経済の成長や爛熟^{注らんじゆく}を経てきた。現在の日本はもはや均一なサラリーマンの国ではない。人々は自分と社会を応分に見つめ、働き方も、暮らしのペースも、興味も趣味も、ひとりひとりがその個性を自覚しはじめている。時には海外を旅し、異なる文化圏の生活にも触れ、マナーに依拠しない豊かさへの認識も肥やしてきた。欲望の土壌の質が、そこに育つ樹々の勢いや実のかたちに影響すると前に述べたが、おそらくは欧州や北米、そして中国とは異なる生活の質への希求が、今日の日本人には充満しているはずである。それは、繊細¹⁰、丁寧、チミツ、簡潔という伝統の美意識がしみ込んでいる土壌でもある。だから今こそ、そこに種を蒔いて、質の高い「住まいのかたち」を育み、収穫する時なのである。

(原研哉『日本のデザイン』による)
(注) 諧謔……………こっけいみのある気のきいた言葉、ユーモア
デベロッパ……………大規模な宅地造成を行う企業、宅地開発業者、都市開発業者

爛熟……………物事が発達しきって、衰えの兆しさえ含んでいる状態になること

問一 傍線部1〜10のカタカナを漢字に、漢字は読みをひらがなに直さない。漢字は楷書で丁寧に正確に書くこと。ひらがなも丁寧に書くこと。

問二 波線部A「これ」は何を指しているか。本文中の言葉を用いて、二五〜三十五字で書きなさい(句読点を含む)。

問三 波線部B「自分の身の丈に合った『住まいのかたち』とあるが、それはどのようなものか。説明として最も良いものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 大家族か夫婦二人か独身かによって自由に間取りを変えられる集合住宅で、自分や家族の体格に合わせた家具や調度をしつらえた住まい。
- 2 限られた土地から効率よく「2LDK」を切り出して作られたもので、返済に困らない程度のお金を金融機関から借り入れて入手した住まい。
- 3 独身者の世帯や夫婦二人の世帯が全世帯の六割なので、全体の六割の部屋は2LDKに、残りの四割の部屋は入居者が自由に設計できる集合住宅の住まい。
- 4 世帯構成、年齢、ライフスタイルなどを考慮した自分にとって住みやすい間取りや内装で、金銭的にも無理なく手に入れられる住まい。
- 5 どのような世帯構成であっても、住む人の体格に合わせた間取りや内装で、外観のデザインも自由に設計できるような住まい。

問四

本文の内容と合っているものを全て選び、番号で答えなさい（誤った番号を選んだ場合は減点）。

1 家のつくり方は、親も学校も教えようがない。なぜなら、家そのもののみならず、人々の生活様式や家族構成、地域社会がこの五十年間で大きく変化し、今も変化し続けているため、上の世代の時代の知恵を下の世代に生かすのが難しいからである。

2 平均的な生涯年収の大半をつぎ込んでも家が買えないことから、中古物件をリノベーションして住む人が増えており、その大半は独身世帯か夫婦二世帯である。彼らは住宅購入費用を抑える代わりに、自分の趣味や興味を優先させた暮らしをしている。

3 筆者が社会人になった頃は、二〇〇〇万円出しても満足な家を買えないといわれた時代だった。当時の筆者は、LDKのマンションが二〇〇〇万円出しても買えないのはおかしいと感じて買わなかったが、当時買っておけば、令和の今、二倍の価格で売れたはずだ。

4 欧州諸国では、街並みの景観を守るため、古い建物を取り壊して新しく立て直すのが難しい。したがって、古い建物をリノベーションするのが家づくりの方法として一般的で、そのための知恵や工夫、制度がある。日本にも耐用年数が長期にわたる建物が増え、それらの再利用がなされつつある。

5 無理なく買える価格の良質な中古マンションの一室を購入し、自分の家族構成や年齢、ライフスタイルに合わせて、できる範囲で手間を惜しまず徹底的にリノベーションすれば、その住まいはその人にとって豊かで充実したものである。

6 今の日本には、欧米や中国とは異なる繊細、丁寧、チミツ、簡潔という伝統の美意識がしみ込んだ地域がある。そのような地域の土壌に樹木の種を蒔いて育て、大きく育った樹木や実を収穫して家づくりの材料とし、日本の伝統的な美意識に基づいた住まいを造る時代がやってきたのである。